

日蓮大聖人御書全集

ぎょうぶのさえもんじょうのにようぼうごへんじ

刑部左衛門尉女房御返事

新版
2070
ゝ
2075

ぎようぶのさえもののじようのにようぼうごへんじ

刑部左衛門尉女房御返事

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

ぎようぶのさえもののじよう

つま

弘安3年('80) 10月21日

59歳

刑部左衛門尉の妻

こんげつひらい

がんしよ

い

じゆうがつみつか

はは

そうろう

今月飛来の雁書に云わく「この十月三日、母にて候

者 じゆうさんねん

あいあ

ぜににじつかんもん

とううんぬん

もの十三年に相当たれり。錢二十貫文」等云々。

そ

げてんさんぜんよかん

ちゆうこう

にじ

ほね

ないてん

夫れ、外典三千余卷には忠孝の二字を骨とし、内典

ごせんよかん

こうよう

まなこ

ふこう

もの

にちがつ

ひかり

五千余卷には孝養を眼とせり。不孝の者をば、日月も光を

惜

ちじん

いかり

み

そうろう

おしみ、地神も瞋りをなすと見えて候。

きよう

い

ろくどう

いっさいしゅじよう

ぶつぜん

まい

あつ

ある経に云わく「六道の一切衆生、仏前に参り集まり

ほとけ

かれ

み

うえ

いちいち

と

たま

なか

たりしに、仏、彼らが身の上のことを一々に問い給いし中

に、ほとけ 仏、ちじん 地神に『なんじ 汝、だいち 大地より重きものありや』と問ひ給おも と たま

いしかば、ちじんつつし 地神敬んで申さく『もう 大地より重き物候』と申だいち おも ものそうろう もう

す。ほとけ 仏の曰わく『のたま いかに地神、ちじん 偏頗をば申すぞ。この三千へんぱ もう さんぜん

大千世界の建立は皆大地の上にそなわれり。だいせんせかい こんりゆう みなだいち うえ 具 いわゆる

須弥山の高さは十六万八千由旬、横は三百三十六万里なしゅみせん たか じゅうろくまんはっせんゆじゆん よこ さんびやくさんじゅうろくまんり

り。たいかい 大海は縦横八万四千由旬なり。その外の一切衆生・じゅうおうはちまんよんせんゆじゆん ほか いつさいしゆじよう

草木等は、皆大地の上にそなわれり。これを持てるが大地よそうもくとう みなだいち うえ たも だいち

り重き物有らんや』と問ひ給いしかば、おも ものあ と たま ちじんこた い 地神答えて云わく

『ほとけ 仏は知ろしめしながら、ひと 人に知らせんとて問ひ給うか。と たも

われ ちじん

にじゅうくこう

あいだ だいち ちようだい

我、地神となること二十九劫なり。その間、大地を頂戴し

そうろう

くび こし いた

こくう とうざいなんぼく ちそう

て候に、頸も腰も痛むことなし。虚空を東西南北へ馳走す

おも

そうら

ふこう もの 住 そうろうところ

るにも重きこと候わず。ただし、不孝の者のすみ候所が、

み 余

おも そうろう

くび 痛 こし 折

身にあまりて重く候なり。頸もいたく、腰もおれぬべく、

ひぎ 弛

あし 引

まなこ 暗 たましい 抜

そうろう

膝もたゆく、足もひかれず、眼もくれ、魂もぬけべく候。

ひと

じゅうしよ

だいち

投 捨

おも こころ

あわれ、この人の住所の大地をばなげすてばやと思う心

しゅつたい

そうら

ふこう

もの じゅうしよ つね だいち 揺

たびたび出来し候えば、不孝の者の住所は常に大地より

そうろう

きようしゅしやくそん

おん従兄弟

だいばだった

もう

候なり。されば、教主釈尊の御いとこ・提婆達多と申せ

ひと

えんぶだいいいち

じようろう

おうしゅしょう

ふこう

し人は、閻浮提第一の上臈、王種姓なり。しかれども、不孝

ひと

われ か した だいち も

だいちわ

の人なれば、我ら彼の下の大地を持つことなくして、大地破

むけんじごく

い たま

われ

ちからおよ

ゆえ

そうろう

れて無間地獄に入り給いき。我らが力及ばざる故にて候』

ちじん 細

々

ほとけ

もう

あ

そうら

と、かくのごとく地神こまごまと仏に申し上げ候いしか

ほとけ

実

がつてん

たま

ほとけ

ば、仏は『げにも、げにも』と合点せさせ給いき。また仏

なげ

のたま

わ

めつご

しゅじょう

ふこう

だいば

歎いて云わく『我が滅後の衆生の不孝ならんこと、提婆に

す

くぎやり

こ

とうんぬん

しゅい

も過ぎ、瞿伽利にも超えたるべし』と」等云々〈取意〉。

ねはんぎよう

まつだいあくせ

ふこう

もの

だいちみじん

おお

涅槃経に「末代悪世に不孝の者は大地微塵よりも多く、

こうよう

もの

そうじよう

ど

少

うんぬん

孝養の者は爪上の土よりもすくなからん」と云々。

いま

にちれんあん

い

きようもん

こと

覚

今、日蓮案じて云わく、この経文は殊にさもやとおぼえ

そうろう

ふ

ご

いまはじ

こと 新

もう

そうら

候。父母の御恩は今初めて事あらたに申すべきには候わ

はは

ご

こと

しんかん

そ

たつと

ねども、母の御恩のこと、殊に心肝に染みて貴くおぼえ

そうろう

と

ちよう

こ

養

じ

はし

けもの

こ

責

候。飛ぶ鳥の子をやしない、地を走る獣の子にせめら

そうろう

め

当

たましい

消

そうろう

れ候こと、目もあてられず、魂もきえぬべくおぼえ候。

はは

ご

たいない

ここのつき

あいだ

それにつきても、母の御恩忘れがたし。胎内に九月の間

くる

はら

つづみ

張

くび

はり

下

の苦しみ、腹は鼓をはれるがごとく、頸は針をさげたるが

いき

い

ほか

い

いろ

か

くさ

ごとし。気は出ずるより外に入ることなく、色は枯れたる草

ふ

はら

裂

ぎ

ごたい

安

のごとし。臥せば腹もさけぬべし。坐すれば五体やすからず。

うむ

すで

ちか

こし

破

切

かくのごとくして産も既に近づきて、腰はやぶれてきれぬべ

まなこ 抜 てん のぼ 覚 かたき 産 お

く、眼はぬけて天に昇るかとおぼゆ。かかる敵をうみ落と

だいち 踏 付 はら 割 す

しなば、大地にもふみつけ、腹をもさきて捨つべきぞかし。

わ く しの いそ 抱 上 ち 舐

さはなくして、我が苦を忍んで急ぎいだきあげて血をねぶり、

ふじよう 濯 むね 搔 付 いだ 抱 さんかねん あいだ

不浄をすすぎて胸にかきつけ、懐きかかえて三箇年が間

おんごん やしな はは ちち 飲 いっぱやくはちじゅうこくさんしやうごころ

慇懃に養う。母の乳をのむこと、一百八十斛三升五合な

ちち 価 いちごころ さんぜんだいせんせかい 替

り。この乳のあたいは、一合なりとも三千大千世界にかえぬ

ちちいっしやう かんが そうら こめ あ

べし。されば、乳一升のあたいを撿えて候えば、米に当つ

いちまんいつせんはつぴやくごじゅうこくごしやう いね にまんいつせんしちひやくそく あま

れば一万一千八百五十斛五升、稻には二万一千七百束に余

ぬの さんぜんさんびやくしちじゅうたん

り、布には三千三百七十段なり。いかにいわんや、

いっぴやくはちじゅうこくさんしょう(じゅう)

一百八十斛三升五合のあたいをや。

たにん もの ぜに いちもん こめいちごう

ぬす

牢

他人の物は、銭の一文・米一合なりとも盗みぬれば、ろう

巢守

そうろう

おや じゅうにん こ

のすもりとなり 候ぞかし。しかるを、親は十人の子をば

やしな こ いちにん はは やしな

温

養えども、子は一人の母を養うことなし。あたたかなる

おとこ いだ ふ

凍 はは あし

夫をば懷いて臥せども、こごえたる母の足をあたたむる

にようぼう

女房はなし。

ぎつこどくおん きんちよう こ

ひ い きようしかふにん

給孤独園の金鳥は子のために火に入り、橋戸迦夫人は

おとこ ちち ほとけ のたま

ふ ぼ つね こ おも

夫のために父を殺す。仏の云わく「父母は常に子を念え

こ ふ ぼ おも とううんぬん ようけんおう い ちち こ

ども、子は父母を念わず」等云々。影堅王の云わく「父は子

おも

こ ちち

おも

とう

を念うといえども、子は父を念わず」等これなり。たとい

こんじよう

ふ ぼ

こうよう

ごしよう

また、今生には父母に孝養をいたすようなれども、後生の

行 方

と ひと

はは い

こころ

ゆくえまで問う人はなし。母の生きておわせしには、心に

おも

ひとつき

いちど

いちねん

いちど

と

し

は思わねども、一月に一度、一年に一度は問いしかども、死

たま

のち

しよなか

ふたなか

ないしだいさんねん

し給いてより後は、初七日より二七日、乃至第三年までは、

ひとめ

かた

と

とぶら

そうら

じゆうさんねん

人目のことなれば形のごとく問い訪い候えども、十三年、

しせんよにち

あいだ

搔

絶

と

ひと

い

四千余日が間のほども、かきたえ、問う人はなし。生きて

とき

いちにちかたとき

別

せんまんにち

おも

おわせし時は一日片時のわかれをば千万日とこそ思われし

じゆうさんねん

しせんよにち

訪

かども、十三年、四千余日のほども、つやつやおとずれな

し。いかにきかまほしくましますらん。

そ げてん こうきよう

こんじよう こう

夫れ、外典の孝経には、ただ今生の孝のみをおしえて

ごしよう

み やまい

こころ なげ

後生のゆくえをしらず。身の病をいやして心の歎きをや

ないてんごせんよかん

にんてん にじよう どう

い

めざるがごとし。内典五千余卷には、人天・二乗の道に入れ

ぶつどう いんどう

て、いまだ仏道へ引導することなし。

そ もくれんそんじや ちち きつせん しし はは しょうだいによ もう

夫れ、目連尊者の父をば吉占師子、母をば青提女と申せ

はは し のち がきどう お

ぼんぷ

しなり。母、死して後、餓鬼道に堕ちたり。しかれども、凡夫

あいだ

し しょうか にじよう

てんげん ひら

み

の間は知ることなし。証果の二乗となりて天眼を開いて見

はは がきどう お

浅

しかば、母餓鬼道に堕ちたりき。あらあさましやというば

かりもなし。餓鬼道に行つて飯をまいらせしかば、わずか

くち い

に口に入るるかと思えしが、飯變じて炎となり、口は

鼎

はん すみ 熾

み とうこ

かなえのごとく、飯は炭をおこせるがごとし。身は灯炬の

燃 上

じんずう げん みず い

ごとくもえあがりしかば、神通を現じて水を出だして消す

みず へん

ほのお

かえん

ところに、水變じて炎となり、いよいよ火炎のごとくもえ

もくれん

じりき

かな

ほとけ

みまえ

はし

あがる。目連、自力には叶わざるあいだ、仏の御前に走り

まい もう

じつぼう

しょうそう

くよう

さんば

参り申してありしかば、十方の聖僧を供養し、その生飯を

と はは

が きどう く

すく たま

取つて、わずかに母の餓鬼道の苦をば救い給えるばかりな

り。

しやかぶつ

ごたんじよう

のち

なのか

もう

はは

まやぶにん

釈迦仏は、御誕生の後、七日と申せしに、母の摩耶夫人に

後

ぼんぷ

たま

はは

おくれまいらせましき。凡夫にてわたらせ給えば、母の

しようにし

さんじゆう

おんとし

ほとけ

成

たま

生処を知ろしめすことなし。三十の御年に仏にならせ給

ちち

じようぼんおう

げんしん

きようけ

しようにか

らかん

たも

いて、父・浄飯王を現身に教化して、証果の羅漢となし給

はは

おん

とうりてん

のぼ

たま

まやきよう

と

たま

う。母の御ためには忉利天に昇り給いて摩耶経を説き給い

ふぼ

あらかん

たま

にぜん

て、父母を阿羅漢となしまいらせ給いぬ。これらをば、爾前

きようぎよう

ひとびと

こうよう

にじよう

こうよう

ほとけ

おも

そうら

の経々の人々は孝養の二乗、孝養の仏とこそ思い候え

た

かえ

みそうら

ふこう

しやうもん

ふこう

ほとけ

ども、立ち還つて見候えば、不孝の声聞、不孝の仏なり。

もくれんそんじやほど

しやうにん

はは

じようぶつ

どう

い

たま

目連尊者程の聖人が母を成仏の道に入れ給わず、

しやかぶつほど だいしよう ふぼ にじよう どう い たてまつ よう

釈迦仏程の大聖の、父母を二乗の道に入れ奉つて永

ふじようぶつ なげ ふか たま こうよう

不成仏の歎きを深くなさせまいらせ給いしをば、孝養とや

もう ふこう い じようみようこ じ もくれん

申すべき、不孝とや云うべき。しかるに、浄名居士、目連

そし い ろくしげどう でし とううんぬん ほとけ じしん

を毀つて云わく「六師外道が弟子なり」等云々。仏、自身

せ のたま われ すなわ けんどん だ じ ふか

を責めて云わく「我は則ち慳貪に堕せん。この事は不可と

とううんぬん もくれん しがあさ

なす」等云々。しかれば、目連は知らざれば科浅くもやあ

ほとけ ほけきよう し い

るらん。仏は法華経を知ろしめしながら、生きておわする

ちち お し はは ふたた あ たてまつ と

父に惜しみ、死してまします母に再び値い奉りて説かせ

たま だいけんどん ひと ほか たず

給わざりしかば、大慳貪の人をば、これより外に尋ぬべか

らず。

つらつら事の心を案ずるに、
仏は二百五十戒をも破り、

十重禁戒をも犯し給う者なり。
仏、法華經を説かせ給わ

ずば、十方の一切衆生を不孝に墮とし給う大科まぬかれが

たし。故に、天台大師、このことを宣べて云わく「過は則

ち仏に属す」云々。ある人云わく「これ十方三世の仏の

本誓に違背し、衆生を欺誑すること有り」等云々。

夫れ、四十余年の大小・顯密の一切經ならびに真言・

華嚴・三論・法相・俱舍・成実・律・浄土・禅宗等の仏・

ぼさつ にじよう ほんしやく にちがつ がんそとう ほけきよう したが

菩薩・二乗・梵釈・日月および元祖等は、法華經に隨う

こうよう

われ すなわ けんどん だ

ことなくば、いかなる孝養をなすとも、「我は則ち慳貪に墮

とがのが

ゆえ

ほとけ

ほんがん

おもむ

ほけきよう

せん」の科脱るべからず。故に、仏、本願に趣いて法華經

と

たま

ほけきよう

みざ

ふぼ

を説き給いき。しかるに、法華經の御座には父母ましまさ

おや

う

ほうべんど

もう

くに

おく

ざりしかば、親の生まれてまします方便土と申す国へ贈り

たま

そうろう

みこと

のたま

か

ど

給いて候なり。その御言に云わく「しかして、彼の土に

ほとけ

ちえ

もと

きよう

き

え

とう

おいて、仏の智慧を求め、この經を聞くことを得ん」等

うんぬん

きようもん

ちしや

ひとびと

こころ

留

云々。この經文は、智者ならん人々は心をとどむべし、

きようしゆしやくそん

ふぼ

おん

と

たま

そうろうきようもん

教主釈尊の父母の御ために説かせ給いて候經文なり。

ほうもん

てんだいだいし

もう

ひと

この法門は、ただ天台大師と申せし人ばかりこそ知つてお

そうら

ほか

しよしゅう

ひとびとし

わし候いけれ。その外の諸宗の人々知らざることなり。

にちれん

しんちゅう

だいいち

おも

ほうもん

日蓮が心中に第一と思う法門なり。

ふぼ

ごこうよう

こころ

ひとびと

ほけきよう

おく

たも

父母に御孝養の意あらん人々は、法華経を贈り給うべし。

きようしゆしやくそん

ふぼ

ごこうよう

ほけきよう

おく

たも

そうろう

教主釈尊の父母の御孝養には、法華経を贈り給いて候。

にちれん

ははぞんしょう

おお

そうら

日蓮が母存生しておわせしに、仰せ候いしことをもあ

背

そうら

いま 後

まりにそむきまいらせて候いしかば、今おくれまいらせて

そうろう

悔

おほ

そうら

いちだいいしろうぎよう

候があながちにくやしく覚えて候えば、一代聖教を

かんが

はは

こうよう

つかまつ

ぞん

そうろう

はは

おんとぶら

撿えて母の孝養を仕らんと存じ候あいだ、母の御訪

もう

たも

ひとびと

わみ

おも

そつらう

い申させ給う人々をば我が身のように思いまいらせ候

嬉

おも

そつらう

粗々

えば、あまりにうれしく思いまいらせ候あいだ、あらあら

書

付

もう

そつらう

さだ

かこしよりよう

かきつけて申し候なり。定めて過去聖霊も、たちまち

ろくどう

くえ

はな

りようぜんじようど

おんまい

そつらう

に六道の垢穢を離れて霊山浄土へ御参り候らん。

ほうもん

ちしき

あ

たま

たびたび聞

たも

この法門を、知識に値わせ給いて、度々きかせ給うべし。

にほんこく

し

ひと

少

ほうもん

そつらう

詳

日本国に知る人すくなき法門にて候ぞ。くわしくはまた

もう

そつらう

きようききようきんげん

また申すべく候。恐々謹言。

じゆうがつにじゆういちにち

十月二十一日

にちれん

かおう

日蓮

花押

おわりのぎようぶのさえもんのじようどののにようぼうごへんじ

尾張刑部左衛門尉殿女房御返事